

日本を見つめ直し、楽しく生活、仕事しましょ、シリーズ

「名こそ惜しけれ」は鎌倉武士を象徴する言葉として知られています。人、ご先祖様、自分に対して「**恥ずかしいことをするな**」という意味です。平安時代中期以降、生まれながら苦勞をしらず、さまざまな争いごとに自ら汗をかいて正す気概を無くした貴族政治が続き、国はだんだん荒れていきました。

これに対して、貴族の支配を逃れようと、武装開拓農民が各地に発生しました。これらの武装農民は貴族と異なり、後ろ盾となる権威をもっていなかったため、領地の民の支持を得なければ勢力を維持、拡大させることができませんでした。

(織田信長の出現まで耕作農民が武力の中心でした)

勇猛でなかつたり、人間として模範足りえなければ、領地の民は従わず、他の主人にくら替えしたりして、領地を守ることができず滅んでいきました。

こうした背景から「名こそ惜しけれ」という人間の美学が生まれました。この、**自分を律することの美学**を土台として、農民のDNAをもった、**民に模範となることを義務づけられた武士**が政権をとった鎌倉時代から、日本は中国、朝鮮と異なつた歴史を歩みはじめることになります。

※戦国時代ポルトガル宣教師は、日本人は他のアジアの国と異なり賄賂や盗みを嫌い、この国の指導者層は、他国の侵略に対して率先して命を賭して戦うだろうと記録しています。

武士の美学は次第に日本人全体のものとなっていき、日本人の基本的な民俗的形質をかたちづくるようになりました。明治維新は武士階級が消滅し、国民全体に支配階級である武士の血がばらまかれる、世界でも稀なことがおこりました。

勤勉で礼儀を重んじ、公のために自分を律する姿勢。 恥ずかしい仕事はできないという職人氣質、お天道さまが見ているという健全な自己抑制の特性は、現代の完成度の高い国内インフラ、農産物、工業製品、基礎科学分野等にあらわれています。

「名こそ惜しけれ」の言葉は忘れられても、庶民の隅々までこの言葉のもつ本質が失われていないことが分かります。



幕末の無名武士

武士という人間像は、日本人がうみだした、多少奇形であるにしても、その結晶のみごとさにおいて人間の芸術品とまでいえるように思える。

「名こそ惜しけれ、恥ずかしいことをするな」という坂東武者の精神は、今も一部のすがすがしい日本人の中で生きている。ヨーロッパで成立したキリスト教的な倫理体系に、この一言で対抗できる。

司馬遼太郎



葉隠「はがくれ」
江戸中期、武士のあり方が述べられている本です